

特 集

思春期の心理療法プロセスにおける漫画・アニメの作用に関する研究

臨床心理学における漫画・アニメに関する文献研究から

京都大学大学院教育学研究科 学校臨床研究会

大澤 尚也、水野 鮎子、渡部 智行、小畠 純一、
長谷 雄太、境 明穂、嶋見 優希、星野 春香

問題・目的

思春期の心理療法や、小中学校での別室登校支援や適応指導教室での支援において、漫画・テレビアニメ（以下、アニメ）の話題がクライアントから口にされることは多い。思春期のクライアントは、しばしば特定の漫画・アニメに熱中し、話の展開、キャラクターの魅力について語る。現実生活や学業についての話には消極的な反応しか示さないクライアントが、漫画・アニメについて活き活きと語ることもある。

児童精神科医の山中（2001a）は、「登校拒否児（不登校児）の特徴は、心的エネルギーが極端に内向している状態とみる」（括弧は筆者による補足）との立場から、「登校拒否児の、『限局した興味』を「窓」と呼んだ。山中（2001b）は、不登校児との精神療法について、「方法の基本を一言にして言えば、患者の示す限局した『窓』に同調させて、その『窓』を通して語り合っていくことである」と述べる。山中（2001a；2001b）の「窓」論は、不登校児が興味・関心を持つ話題を通して語り合うことの重要性を指摘したものと言えるだろう。山崎（2019）もまた、児童精神医学の立場から、不登校の子どもとの面接では、学校や周辺の話だけでは行き詰りやすいことを指摘し、「子どもが興味・関心を持っていることや趣味の話など、不登校とは直接関係がないようなテーマでやり取りする時間も大切である」と指摘している。前述した漫画・アニメも「趣味の話」の一つとして、思春期のクライアントとの関係をうまく結ぶための「窓」の側面を持つと言えるだろう。

しかし、漫画・アニメについて調査の俎上に載せた研究は多くない。漫画・アニメの作品、あるいはその語り方は、個別性が大きく、時代の流行の影響も大きいために、事例研究ではない形で、漫画・アニメにアプローチする切り口を見出しづらく、そのことが調査研究の少なさの要因の一つとなっていると考えられる。今回は、心理臨床学において漫画・アニメを扱った先行研究の理論背景や分析手法を明らかにすることを目的とする。それを踏まえて、思春期の心理療法プロセスにおける漫画・アニメの作用を調査するには、どのようなアプローチを取り得るか検討する。

方法

これまで、臨床心理学の観点から漫画・アニメを検討し、書籍化された研究が多数刊行されてきた。

今回は、その内、力動的な視点から漫画・アニメを扱った書籍のうち、著者のオリエンテーションの偏りを避けるために、精神分析の立場から漫画・アニメを取り上げて論考している斎藤（2000）、ユング心理学から分析している岩宮（2013）と西村（2004）、臨床心理学の特定の学派の理論に依らず、登場人物の感情体験に着目して漫画・アニメが持つ作用を検討している横田（2017）を取り上げ、漫画・アニメを、どのような観点から取り上げ、分析しているか検討した。

また、漫画・アニメを扱った臨床心理学の論文を調べるため、『心理臨床学研究』の1巻から37巻（調査を開始した2020年3月時点での最新巻）に掲載された論文のうち、タイトルやキーワード、考察に「漫画」「マンガ」「アニメ」、あるいは特定の漫画・アニメのタイトルが含まれるものを調べた。その結果抽出された17本の論文について、研究デザインや、該当論文における漫画・アニメに関する考察を検討した。

結果・考察

心理臨床学における漫画・アニメに関する文献には、(a) 特定の作品群を分析した研究、(b) 調査研究、(c) 事例研究の大きく3種類が見られた。

(a) 特定の作品群を分析した研究

書籍化された研究は、全て(a) 特定の作品群を分析した研究に分類された。斎藤（2000）は、戦闘美少女(アニメのストーリーの中で戦いに身を投じる少女)が日本のアニメに特異的に見られると指摘し、戦闘美少女を、トラウマ等の生育歴上の理由なく暴力に身を投じる、ファルスに同一化した女性像と捉え、いわゆる“おたく”が“ファリックガール”を欲望するのはなぜか、ラカン派の精神分析理論をもとに考察している。登場人物を欲望する心理機制的理解から、観客（“おたく”）の心性の分析を試みていると言えるだろう。

アニメに登場する美少女に着目する点は共通しているが、西村（2004）は、元型心理学の観点から、アニメ（体験の深みを構成する“魂”の元型）のイメージとして、あるいは思春期の自我意識の投影として考え、『美少女戦士セーラームーン』や『スレイヤーズ』、『新世紀エヴァンゲリオン』などを取り上げている。斎藤（2000）と異なり、西村（2004）は個々のストーリーを詳細に分析しており、例えば、『スレイヤーズ』に見られる世界の破滅と再生のストーリーを、「思春期女子のイニシエーション」における「死と再生」のプロセスとして読み解いている。スタジオジブリが制作したアニメ映画を取り上げた岩宮（2013）もまた、『となりのトトロ』や『千と千尋の神隠し』などの個々のストーリーを詳細に分析し、思春期の少年少女がなす心理的テーマの展開を見出している。

横田（2017）は、特定の臨床心理学の学派に依らず、日本で流行したテレビアニメやアニメ映画に共通して見られるストーリー展開を分析して、流行映画の観客である「日本人の現代の心理」を描こうと試みている。横田（2017）は、主人公が、強い感情を喚起させられる出来事をきっかけに、深い混乱に陥るが、個（他者）との出会いの体験により混乱が解消し、現実に向かって心が動き出して現実適応を回復するストーリーの流れが描かれることを指摘している。

以上より、特定の作品群を分析した研究は、観る者と作品との関係や、作品のストーリーに、観る者の心理的テーマを読み取ることができる点を示していると考えられる。

(b) 調査研究

『心理臨床学研究』に掲載されている、漫画・アニメを扱った論文のうち、(b) 調査研究の結果が報告された論文は、森定（2001）と笹倉（2010）の2本のみであった。森定（2001）は、毛布やぬいぐるみ、ペット、音楽や映画と並んで、本・漫画、アニメを「慰める存在」の一つと捉えて調査を行い、想像上の仲間（imaginary companion）と、音楽や漫画・アニメのキャラクターを思い描く時の気持ちとの間に高い相関が認められたことを報告している。

より直接的に漫画・アニメを題材に調査を行った笹倉（2010）は、大学生を対象としたインタビューで、好みの漫画・アニメについて語ってもらい、「マンガやアニメについて他者に語るプロセス」を検討している。笹倉（2010）の調査では、「マンガやアニメについての語りが聴き手と共有されるのと並行して、その作品にまつわる語り手自身の内的・外的体験が語られ、そこから作品と語り手自身とのつながりが明らかとなり、語り手自身のことへと内省が深まっていく」というプロセスが見出された。そのプロセスにおいて、漫画・アニメの登場人物やストーリーを主語とした客観的説明と、語り手自身を主語とした語り手自身の思いの主観的語りとで、「語られ方」の相違があると報告されている。笹倉（2010）は、「直接的に“自分”について言及できずとも、【作品について伝えようとする語り】を語れることによって、クライアントは作品にまつわる自身の内的・外的体験というかたちで、“自分”について語ることができるようになる」と述べ、漫画・アニメの「語られ方」に着目することを提唱している。思春期心性との関連で「マンガやアニメについて他者に語る」ことの検討から、「語られ方」に着目する視点を提示した点で、本研究の目的に照らして意義深いものと言えるだろう。

(c) 事例研究¹

15本の事例論文のうち7本は、クライアントの理解を深める題材として漫画・アニメを用いていた。典型的な論文として、例えば、金山（1995）は、クライアントが好むキャラクターの特徴と、クライアントのテーマとの類似性を見出し、好む対象が「マンガ的イメージからより青年期的イメージへと変化した」点から、クライアントの心理的発達を読み取っている。梅村（2011）も、遊戯療法においてクライアントが遊びの題材とした主人公の姿に、クライアントと「通じるもの」を感じ、さらに展開する遊びとクライアントの“主体”の成立との関連について考察している。これらの研究は、クライアントが語る漫画・アニメのキャラクターなどから、クライアントの理解を深めることができる点を示していると言えるだろう。加えて、そこで展開するイメージの変化にも、象徴的な意味を読み取ることができる点が示唆される。

漫画・アニメについて語る行為に焦点を当てた事例論文も2本見られた。舩田（2009）はマンガやアニメを題材とした「架空世界での遊び」を共有することの意義を考察している。“共有”に意義を見出す視点は佐藤（2010）も同様であり、「ファンタジーを他者に語るという行為は、未熟な形ではあっても、他者と関係を持とうとする動き」であると捉えて、事例の展開を考察している。これらの事例論文では、

¹ 心理臨床学の専門家・専門機関向けに発行される学術雑誌である『心理臨床学研究』で公刊された事例論文の内容（クライアントの主訴、性別や年齢や語り等）を、より公開範囲の広い本報告書で言及することは、事例のプライバシー保護の観点から望ましくないと考え、本報告書では、各論文における著者の考察の仕方のみ、分析の対象としている。

クライアントが他者と関係を築く機能、すなわち社会性の発達を促進するものとして、漫画・アニメを語る行為を捉えていると考えられる。

漫画・アニメを語る行為と、漫画・アニメの内容との両方について考察した研究も、2本見られた。小笠原（2009）はアニメについて話すこと、永山（2017）はアニメをセラピストに見せることを取り上げているが、いずれもクライアントの社会性の発達を促す機能を持つと考えているとともに、「自分だけでは表現できない思いや象徴的な内容」（永山，2017）といった心情の表現とも捉えていた。臨床事例においては、語られる漫画・アニメのイメージにクライアントの心理を読み取る視点と、漫画・アニメをセラピストに語ることを意味を考える視点との両者が重視されてきたと言える。

その他、漫画に関して秘めていた思いを口にした意義を考察した論文（小俣，1999）、クライアント理解を深めるために、連想された漫画の考察を行った論文（吉田，2004）、漫画を読むことをストレスコーピングの一方略として捉えた論文（小澤，2014）が見られた。

総合考察

漫画・アニメに関する臨床心理学の研究では、(a) 語られる題材に焦点を当てる立場と、(b) 語る行為に着目する立場とが主に取られてきたと考えられる。(c) 事例論文でも、この両者の観点からなされた考察が多く見られた。語られる漫画・アニメの内容の考察と、語る行為に着目した考察の両方を行っている事例論文も見られたことから、臨床実践において、いずれの視点も重視されてきたと言える。

調査研究においても、この両者それぞれに着目した研究を行う必要があるのではないだろうか。すなわち、漫画・アニメの主人公を始めとした登場人物、ストーリーの類型と、読者層・視聴者層（年代や性別、あるいはパーソナリティ特性など）との関連を調べることで、ロールシャッハ・テストの反応頻度や、箱庭療法のアイテム・場面の出現率などの基礎研究と同じように、クライアントが漫画・アニメについて語った際に、クライアントの一般的特徴や、個別的な特徴を理解する参照枠となると考えられる。加えて、笹倉（2010）が漫画・アニメの「語られ方」と自我同一性との関連を示唆したように、その内容だけでなく、語り方にも、語り手の心性が現れていると考えられる。笹倉（2009）は、話者が、作中の語り手（主人公）を主語にストーリーを語ることに、語り手の「私」を再構成する働きを見出している。例えば音楽やスポーツ、小説などと違い、漫画・アニメはキャラクターに自己像を投影しやすい点やストーリーを持つ点、キャラクターやシーンの視覚イメージを他者と共有しやすい点が特徴的であろう。こうした特徴が、クライアントが語る行為を容易にしつつ、「私」を再構成する働きを促進していると考えられる。語り手であるクライアントの「私」が投影されやすい、作品のストーリーの分析と、漫画・アニメの語り方との両面の切り口について、自我同一性などの思春期のテーマとの関連を検討していくことが今後必要だろう。

引用文献

- 岩宮恵子（2013）．好きな人にはワケがある——宮崎アニメと思春期のこころ．ちくまプリマー新書．
- 金山由美（1995）．激しい行動化を伴う側頭葉てんかん者との心理療法過程．心理臨床学研究，13，191-202．
- 舛田亮太（2009）．引きこもりがちな高機能広汎性発達障害青年との心理療法過程——日常的解離と橋渡し機能の視点から．心理臨床学研究，27，468-479．
- 森定美也子（2001）．思春期における慰める存在——移行対象の観点から．心理臨床学研究，19，535-541．

- 永山智之 (2017). 自閉スペクトラム症と診断された青年への個人療法とグループ活動のコンパインド・セラピー. 心理臨床学研究, 35, 526-537.
- 西村則昭 (2004). アニメと思春期のころ. 創元社.
- 小笠原 洋 (2009). 学校における「遊戯の場」の特徴とその意味——スクールカウンセリングにおける不登校生徒の事例による検討. 心理臨床学研究, 27, 208-219.
- 小俣和義 (1999). 母親と協力して支えた思春期女子の事例——同一治療者による母子併行面接を通して. 心理臨床学研究, 16, 538-549.
- 小澤永治 (2014). 自閉症スペクトラム障害をもつ自動予後施設への多面的アプローチ——生活場面及び関係性への支援に着目した検討. 心理臨床学研究, 32, 588-598.
- 斎藤 環 (2000). 戦闘美少女の精神分析. 太田出版.
- 笹倉尚子 (2010). 漫画やアニメについて他者に語るプロセス. 心理臨床学研究, 28, 16-27.
- 笹倉尚子 (2009). 虚構を語ることと心理臨床. 京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター紀要, 13, 47-53.
- 佐藤祐基 (2010). ファンタジーへの没頭を示したクライアントが現実との繋がりを形成するまで——高機能広汎性発達障害が疑われる男子中学生の事例. 心理臨床学研究, 28, 279-290.
- 梅村高太郎 (2011). 心理療法過程における身体の否定——喘息・音声チックなどのさまざまな身体症状を呈した低身長男児とのプレイセラピー. 心理臨床学研究, 28, 787-798.
- 山中康裕 (2001a). 「登校拒否」および「いじめ」と文化変容. 山中康裕著作集 I たましいの窓——児童・思春期の臨床 1. 岩崎学術出版社. pp.240-241. 初出は 1998 年.
- 山中康裕 (2001b). 思春期内閉. 山中康裕著作集 I たましいの窓——児童・思春期の臨床 1. 岩崎学術出版社. pp.142. 初出は 1978 年.
- 山崎 透 (2019). 不登校支援の手引き——児童精神科の現場から. 金剛出版. pp.72.
- 横田正夫 (2017). 大ヒットアニメで語る心理学——「感情の谷」から解き明かす日本アニメの特質. 新曜社.
- 吉田 明 (2004). セラピストはクライアントと“どこ”で会えるのか——風景構成法が面接の指針となった事例を通して. 心理臨床学研究, 22, 520-530.